タイトル	本当に残酷な中国史 大著「資治通鑑（しじつがん）」を読み解く
著　　者	麻生川静男（あそがわしずお）
出 版 社	角川 SSC 新書
発 売 日	2014 年 9 月 10 日
ページ数	245 ページ

資治通鑑は紀元前 500 年から、紀元後 1000 年の約 1500 年の中国の歴史を、北宋の学者であり政治家だった司馬光がまとめたものである。時代的には、藤原道長とほぼ同時代の人である。

歴史書を文学書より重要視する中国では、古くから史書といえば、司馬遷（しばせん）の『史記』、班固（はんこ）の『漢書』と並んでこの『資治通鑑』の名前が挙がる。

史記は司馬遷ひとり、漢書は班固をメインとして父の班彪（はんみょう）、妹の班昭（はんしょう）の親子 3 人の手になるものに対して、資治通鑑は司馬光をリーダーとする数十人の編纂チームが 20 年近くかけて書いた中国の歴史 1500 年の大ページェントである。

それだけに分量も半端ではない。字数は「史記」の 6 倍（史記は 50 万文字、資治通鑑は 330 万文字）、登場人物は 1 万人、ページ数は 1 万ページ（中華書局版）。このような大部の本であるため、日本では江戸時代に返り点付きの本は出版されたものの、全巻を通して読まれることは少なく、特定の箇所（例えば、三国志の部分、唐の太宗の部分、など）が部分的に読まれたのではないかと著者は言う。また、いまだに日本語の完訳がないため、今の日本人には馴染みが薄い。現状では抄訳の「資治通鑑」（例・・・平凡社、朝日新聞、明徳出版社）を読むしかないが、これらはあまりにも断片すぎる上に、「資治通鑑」からおぞましい部分をカットして日本人の感性にフィットする倫理・道徳の教訓的な部分を中心に編集しているため、とても「資治通鑑」のもつ凄さが伝わってこない

著者は、1 万頁にも上るこの大著を簡便な新書にまとめている。なぜ、本書を、取り上げたかというと、「資治通鑑」を読み終えて「資治通鑑を読まずして中国は語れない、そして、中国人を理解することも不可能である」と痛感したからだという。「論語」や「史記」、「三国志」などでは決して得ることのできない中国の本質を「資治通鑑」からうかがい知るこ

とが出来ると確信したからだという。

「資治通鑑」は、史実に忠実であることを旨とするため、他の歴史書が省いている中国の悪事も詳細に書き込まれていると説明する。その意味で、「善」においても「悪」においても、日本人よりはるかにスケールが大きい中国人の本質を知るのに最適の書だと著者は言う。

本書では、中国の長い歴史の中で実践されてきた「善」と「悪」のうち、主として巨悪の実例を全体の 3 割にわたって列挙している。日本で昔から読まれている『十八史略』（正史の簡略版）では解説するのもはばかられる部分は省略されている。

さて、目次を見ておこう。

目次

序章　資治通鑑とはどういう本か
幻の書「資治通鑑」
何が書いてあるのか？
中国では資治通鑑はどういう風に読まれたか？
日本では資治通鑑はどういう風に読まれたか？
なぜ資治通鑑を読む必要があるのか？
資治通鑑から何を学びうるのか？
なぜ今まで読まれなかったのか？
なぜ私が資治通鑑を読んだのか？
資治通鑑を読むと人生観が変わる
第1章　残酷を極める中国人
・・・
中国人の食人習慣
人肉より旨いものはない
太らせてから殺して食べる
平和な時代は退屈、戦乱の時代が面白い
・・・
第2章　中国人のド派手な贅沢・桁外れの蓄財
過去から綿々と続く豪奢の伝統
・・・
弥生時代の中国の贅沢
・・・
ド派手な食卓
・・・

第３章　陰険な中国人の策略

ナイーブな日本人

① 互いの妬みや恨みを利用する

② 高位者を利用して報復する

③ 味方をも欺く

④ おだてて自滅を待つ

⑤ 表では友好を装い、裏では陥れる策を練る

⑥ 奸計で無実の人を陥れる

⑦ 面子を守るためには、不正・不義も断行する

⑧ 権道―――義を貫くためには汚い手段も辞さず

中国人の善悪のレンジの広さ

今からほぼ60年前に評者が高校時代に読んだ中国の古典では、仁や徳を身につけ、人格を高める必要性が盛んに説かれていた。為政者や上に立つものが、精神修養に努めることで天下や組織が自然とうまく治まり、慈愛に満ちた理想の社会が実現するのだと力説されていた。中国の文化にあこがれ、高校時代には、漢書を読みふけったものである。

ところが、現代中国に関する本や、テレビ、新聞、雑誌、ネットなどの報道では、決まって役人の汚職、想像を絶する環境汚染、少数民族弾圧などの中国の汚い面のオンパレードになっている。論語の中国は一体どこへ消えてしまったのだろうか？

著者が得た結論は、「現代の中国人は論語の時代と「類」が異なる」ということだったという。

どういうことかというと、「論語」や「三国志」の時代の中国は、漢民族の倫理が支配していた。しかし、三国志の後の王朝である晋の時代に異民族が中国に大量に流れ込み、国全体が大混乱に陥った。異民族が力をつけ、五胡十六国という異民族の国家が中国の北部を支配した。この結果、中国の徳治や仁義といった政治倫理が全く地に落ちてしまった。代わりに、詐術と武力が支配原理となった。

その後、隋唐の絶頂の後、五大十国という分裂の時代を経て、再度中国全土を統一した宋では漢民族の本来の政治への復古主義が主流となった。その宋も金に北部を奪われて、南宋となってから、朱子が大義名分を一層声高に叫んだ。しかしながら、その後の歴史が示すように、中国の支配原理は、二度とかっての「論語」や「三国志」の時代に戻ることはなかった。つまり、現在の中国の政治・社会を支配している基本理念は我々が知っている中国古典の世界ではないのである。

後漢の混乱から、三国志、晋と下るにつれて、周辺の異民族が中原（黄河中流域の中国文明発祥の地）に侵入し、混乱がその極みに達した。「資治通鑑」はその様子を冷酷なまでの正確な筆致で描写している。

「資治通鑑」は、戦闘行為に随伴する残虐行為から、単なる殺人狂の所業に足るまで、かなり史実に忠実に描かれている。たとえば、籠城の際の食糧難に食人は当たり前だし、権力者が逆らった部下を見せしめのために殺して部隊全員に食べさせたりする食人の事例は数え切れない。

本書に紹介されている事例は、朝鮮半島の慰安婦だった人たちが日本軍の蛮行として主張した具体例とすべて重なるという。つまり、そうした蛮行は中国と朝鮮半島の伝統であるということに気付かされるという。

本書を、欧米の人々が読めば、旧日本軍に着せられた汚名の濡れ衣はすぐに晴れることだろうと著者は言う。

問題は、今現在も中国の指導者層が「資治通鑑」に書かれている謀略、暴虐を至上の価値観と考えているらしいことである。

毛沢東（以下毛）はこの大部の書を１７回も読んだという。毛は 1958 年に始めた「大躍進政策」で約 2000 万人の農民を餓死させた（餓死者は 1500 万人から 4000 万人と推定されている（「岩波現代中国事典」p /696）。1966 年から 10 年にわたる「文化大革命」では少なくとも 3000 万人の知識人や富裕層を死に追いやった。史上空前の国民大虐殺を犯した毛が、謀略とその具体的手法を学んだのが、「資治通鑑」で、これは毛にとっての「陰謀の指南書」だったという。

そして今、毛の手法に倣（なら）っているのが習近平国家主席である。比類なく残酷で謀略にたけた毛の手法に学ぶ習体制の中国に、これから日本は向き合っていかなければならない。

中国は日本に比べて国土も歴史も比較にならないほどスケールが大きい。物理的なスケール以上に、彼らは日本人には想像を絶する異民族のすさまじい 寇掠（こうりゃく）を生き抜いてきた逞（たくま）しさがある。しかも、日本に比較にならないほど過去の伝統の「慣性力」が強いため、現実の中国に向き合う前に「資治通鑑」のような赤裸々に中国の恥部をえぐった歴史書を読み、彼らの思考体系の一端をしっかりと把握することが、歴史的に長らく平和国家の幸運に恵まれた日本人には必須であると考えると著者は言う。

橋本 左内（さない）は安政の大獄で投獄されたが、獄中で「資治通鑑」を読みながら注をつけたと言われている。その他岩崎弥太郎、西郷隆盛、坂本竜馬、徳川 慶喜（よしのぶ）など、かっての日本の指導者たちは「資治通鑑」を読み、中国人の本質を理解した上で対処しようとしたことが知られている。

著者は、本書の出版は、今現在日本で流行している反中論を煽るものではなく、中国人あるいは中国社会を正しく理解するために必要だと考えたからだと述べる。著者の願いは、本書で中国の伝統的社会における善/悪の実態を知ることで、一人でも多くの日本人に今後の日中関係のあり方を公平な視点から考えてもらうことであるという言葉で本書を閉じている。

それにしても、現在の日本のナイーブな（騙されても仕方のない間抜けな）政治家、官僚、言論人の中国への対応を見ていると大丈夫だろうかと不安になってくる。

中国の脅威がここまで大きくなっているというのに、日本国内では「空想的平和主義」に浸り続けている人々が多い。というのも、日本は、権謀術数渦巻き、大量殺戮が常であった世界とは隔絶して、ガラパゴス的に発展した世界でも稀有な島国であるからだ。

我が国は、世界でも中国以上に変わった異質な国であるとの自己認識がなければ、これからの世紀は生き抜けないだろう。

2016.1.3